

—スタッフ紹介—

役 職	スタッフ名
主任部長 甲状腺センター長	高野 徹
部長兼糖尿病センター長 兼リハビリテーションセンター副センター長	樫根 晋
医 長	大槻 朋子
医 長	倉敷 有紀子
医 長	伊藤 博崇
副医長	高山 瞳
医 員	酒井 保奈

—概要—

糖尿病・内分泌代謝内科では糖尿病および内分泌代謝疾患患者の外来および入院診療を行っている。外来部門において、糖尿病、甲状腺疾患、その他の内分泌疾患の外来診察、検査および糖尿病合併症進行予防のための療養指導(フットケア外来、透析予防外来)を行っている。病棟部門においては内分泌代謝疾患および一般内科疾患の入院中の管理を行っている。また他科入院症例の血糖コントロールを共観として担当している。スタッフは昨年と変化はなかった。

—実績—

外来診療については、糖尿病、甲状腺、その他内分泌疾患の患者を主に診療し、1か月の平均外来症例は674人であった。また検査として甲状腺エコーおよび穿刺細胞診を当科で実施している。また2021年11月に日本甲状腺学会認定専門医施設に認定された。

入院総症例数は259症例であった。内訳は糖尿病107例(1型糖尿病11例、2型糖尿病90例、膵性糖尿病6例)であった。また本年10月より妊娠時糖代謝異常の症例を当科にて担当開始し32症例を経験した。内分泌疾患は26例(下垂体機能低下症精査12例、甲状腺疾患1例、原発性アルドステロン症精査6例、副腎精査7例)であった。救命救急科入院後の転科症例として 低血糖性昏睡3例、高血糖高浸透圧症候群1例、糖尿病ケトアシドーシス4例であった。睡眠時無呼吸症候群精査26例、一般内科症例38例(尿路感染症5例、肺炎24例、電解質異常9例)、その他の症例は22例であった。入院中の他科依頼による共観については375症例を担当した。

糖尿病患者の外来での療養指導としては糖尿病透析予防指導を76件行った。またフットケア外来における患者指導は1年で214件の指導を行った。

院外啓発活動として、第5回世界糖尿病デー、りんくう健

康フェスタを昨年と同様に行った。本年のテーマは『インスリン』であり、インスリンの発見から臨床応用に至る歴史、生体内でのインスリンの働き、現在使用されているインスリン製剤に到るまで詳細なポスターをスタッフ一同で作成し、11月2日から19日までCブロック横壁面に展示した。ポスターだけでなく同様の内容でパンフレットを作成し、514名の当院通院患者に配布した。

—今年度の成果と反省点—

コロナ禍で昨年に引き続き糖尿病教育入院が減少しており、積極的に内科一般入院患者を受け入れた。2021年10月より妊娠糖尿病、糖尿病合併妊娠などの妊娠関連糖代謝異常症例を当科にて対応することとなり、半年で32症例を担当した。

また小児科から成人科への移行期医療を円滑に進めるため、府立母子医療センター小児科と合同で移行期カンファレンスを開催し、2症例を府立母子医療センター小児科から当科外来に受け入れた。

—来年度への抱負—

妊娠関連糖代謝異常症例については、クリティカルパスを作成中である。また患者説明用の当院オリジナルのパンフレットを各職種で共同して作成中である。

コロナ禍で一か所に集まるような啓発活動は引き続き行いくため、パンフレットの作成などを行い、活動を継続していきたい。また外来通院患者の糖尿病合併症の評価とケアは糖尿病センターにて継続的にモニタリングを行っている。継続的に評価が行えるシステム作りが必要である。